文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
令和二年二月一日発行（毎月一回一日発行）
第九十八巻第二号（二月十日号）

「消費税ゼロ」で日本は甦る 政策論文 山本太郎

総力特集 2020年の「羅針盤」/わが友 中曽根康弘 渡邊恒雄 新春特別号

将軍の世紀

第二十六回 中興この時なり

武家の困窮をいかに解決するか――。名君・吉宗の改革は、その一点に尽きた。

山内昌之（やまうちまさゆき）
武蔵野大学特任教授・東京大学名誉教授

（上）同時期の名君・フリードリッヒ大王
（下）吉宗の政治的助言者・荻生徂徠

（『先哲像伝』より）

一、吉宗と康熙帝とフリードリッヒ大王

「この皇帝の精神的美質の方が肉体的美質よりも遥かに優れております。この皇帝こそ最善の資性を生まれながら備えておられるのです。俊敏な、透察的な知性、立派な記憶力、驚くべき天分の広さ、如何なる事件にも堪えうるほど剛毅であり、大計画を立てて、これを指導し、これを完成するに適するほど強固な意志力を持っておられます。その嗜好や趣味はいずれも高貴であり、大王たるに適わしいものであります」（ブーヴェ『康熙帝伝』）。

フランス人のイエズス会宣教師、ジョアシャン・ブーヴェ（白晋）による清朝・康熙帝の礼賛は、ほぼ同時代の李朝の朝鮮通信使製述官・申維翰による徳川吉宗への評価に通じるところがある。「吉宗は、ひととなりが精悍にして俊哲、今年三十五歳である。気性が魁傑にして、かつ局量あり、武を好んで文を喜ばず、倹を崇んで華美を斥ける。（中略）その政治をなすに、必ず敦朴を先んじ、窮民を撫恤し、租税の未納を削減し、死罪を犯したる人は、あるいは鼻を割いてその死に代える。国人あげて讃頌せざるものはない」（『海游録』）。

一六八八年（康熙二十七）らしきブーヴェの描写や享

保四年（一七一九）の申維翰の観察は、どうかすると主君の粛宗やルイ十四世への評価よりも高いと錯覚させるのではないか。『南紀徳川史』（1、巻八）の吉宗描写はまず無難といってよいだろう。「御弱年ノ御時御身ノ長六尺余ニ足セタマフ凡七百人之中ニ御頭出セタマフ（中略）御力抜群ニ勝レサセタマエ御威望厳然トシテ拝スル者畏怖セサルナシ。麻面色黒ニマシマセトモ御生質柔和ニ御座ナサレ候故小児馴昵ミ奉リシト云フ」。身長百八十センチと伝えられる吉宗は、生涯怒った表情を見せたことがなかったという。そのうえ、康熙帝と吉宗は、代数・幾何・天文・暦法などへの関心も共通していた。違いは康熙帝がイエズス会士から知識を吸収したのに対し、キリスト教禁教令もあって吉宗は長崎経由で少しずつ知識を得たことだろう。吉宗は享保五年に禁書令を緩和し、六分儀、天体望遠鏡、工作盤、時計も輸入し、さらに数学者・建部賢弘に『暦算全書』を訳させるなど、時計の実用性にもまして象徴性に価値を見出したようだ。時計が刻む時間はその目的や結果もさることながら、それを計測する器械やその流儀のプロセスにむしろ価値があると考えたようだ。技術を結果だけで見るのではなく、それを生み出す基礎科学を重視したのだろう（Yulia Frumer, *Making Time: Astronomical Time Measurement in Tokugawa Japan*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 2018, p.71）。

吉宗は、康熙帝はもとよりプロイセンのフリードリッヒ二世（大王）とも同時代人であり、子の家重に将軍位を譲る直前の和蘭風説書（長崎のカピタン情報）から、フリードリッヒ二世のボヘミア侵攻（第二次シュレージエン戦争）とプラハ占領を知ったことだろう、「ドイチ国の近辺、プロイシ国の主、隣国プラアカと申す所を切り捕り申し候、然る処、オンゲレインの国主より、人数を以て右プロイシ国の主を又々取囲み居り候由申し越し候」（延享二年・一七四五年六月廿七日、『和蘭風説書集成』上）。オンゲレインとはハンガリーのことだ。将軍襲位前から御三家にも伝えられた風説書から、康熙帝の存在を強く意識していたはずだ。「去年北京の帝王え、咬嚕吧（カラパことジャガタラ）阿蘭陀人より商売為す使者を遣し、北京に少々阿蘭陀人召し置き申し候所を望み申し候得ども、居所の儀は免し申さず」。ただし康熙帝は、福州でオランダが五年に一回貿易をすることを許した（貞享四年・一六八七年七月廿日、『和蘭風説書集成』上）。吉宗は、『明律』の和文翻訳や『大清会典』などの収集や研究を命じながら、康熙帝の実像や明清朝の国家構造をつぶさに理解したのではないか（大庭脩『徳川吉